

ピアサポーター特集号…

ワン・オールの仕事のひとつに、ピアサポーター活動の応援があります。

ピアサポーターみなさんからの希望で平成25年4月からはじまった『ピアサポーター交流会』に参加し、ピアサポーターみなさんの生の声を伺ってきています。この交流会は、ほぼ2か月に1回開かれており、12月18日で通算12回目になります。5事業所に配置されたピアサポーターさんの交流は随分と進んできていると感じています。

これとは別として、ピアサポーターが配置されている5事業所(あさかげ、すきっぷ、ほくほく、ほぼ、ほらりす)に集まっていたいただき、『ピアサポーター配置事業所意見交換会』も開いています。ここでは、事業や活動の検討を行っています。通算4回目になる12月の集まりでは仕組みの見直しも考えながら、活動の整理などを行うことになっています。

この度、「ワン・オール プレス」の【ピア特集号】をお届けします。ピアサポーターの活動などを紹介したいと考えています。まずは、昨年7月からワン・オールのピアサポーターとして活動してくれている三島さんからレポートです。今後も、随時【ピア特集号】を発行しますので、どうぞよろしくお願いいたします。(oku)

リカバリー全国フォーラム報告

8月29・30日、今年で5回目の「リカバリー全国フォーラム」が東京で行われました。今回は、行政のサービスの決定に当事者がどう参加していくかを中心に、発表が行われました。

●特別記念講演

講演したユミコ・イクタ氏は、障害の当事者で、ニューヨーク市の健康・精神衛生部リハビリテーションプログラムを管理・監督する立場です。会社が「この仕事ができる当事者を雇いたい」といってイクタ氏が採用されました。さすがニューヨークですね！



ニューヨーク市では、「ピアスペシャリスト」の資格を持った当事者が、若者の退院の支援や、パニック発作で病院に行けない人のための施設で看護師の代わりにするなど、様々な場面で活躍しています。市で

5億円の予算がついているそうです。

成果や確かな計画をもとに、予算がついて進められる点は、なるほどアメリカらしいと思いました。

●シンポジウム

第一線で活躍する当事者・家族の4人から、それぞれ発表がありました。私の印象に残ったのは…

- 精神障害者の社会運動は遅れている。もっと意思表示できる当事者が増えていい
- 意見を磨いて、一般の人に通ることを言う
- 家族は当事者とともにもっと学び、問題意識を持つ
- 地域・社会にもわかってもらえる。なぜなら、4人に1人は精神疾患を抱えている
- 自分の置かれた状態を、よい方向に受け止める。
- 批判・攻撃しても仕方ない
- 今はピアスタッフが人気だが、将来は精神障害者がどんな職にでも就けるように
- 私たちは支援されるだけの存在ではない
- 中でも興味深かったのが、「病棟転換型居住系施設」の検討会についての話でした。(裏へ続く)

じょうざんけいけんしゅうほうこく ピア定山溪研修報告

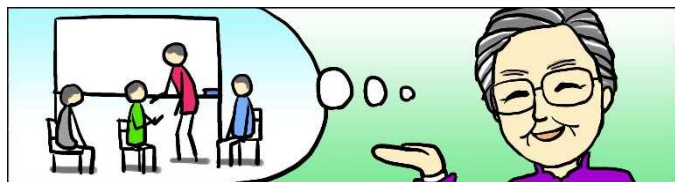
10月1日～3日、「このころのリカバリー総合支援センター」による、全道の精神障害者ピアサポーターが集まる年に一度の定山溪研修が行われました。

今回の山場は、日本のSSTの第一人者、前田ケイ先生によるSSTの実演です。

SSTとは、人間関係の中で「もっとこうしたい」という点をかなえるための技術をつ身につける練習の仕方です。たとえば「〇〇さんに上手に感謝を伝えたい」なら、ロールプレイで他の人に「〇〇さん」を演じてもらいながら、実際の場面で上手に感謝を伝えられるように、みんなの意見を借りながら練習します。

前田先生の実演では、支援者としてどういう点に気をつけながらSSTを行うかを学びました。本人の希望を上手に引き出し、「じゃあそうするためには何を練習しようか？」とスムーズにSSTへとつながる様子が実にあざやか。

施設でプログラムとして行われるSSTは、困りごと探しから始まったり、あらかじめ用意されたお題から選んで練習を行ったりしますが、今回見たのは本人の希望に寄り添った「希望志向」の生きたSSTでした。



83歳にしてかくしゃくとしていらっしゃる前田先生ですが、最後の「対象者が亡くなった時にどう受け止めればいいのか」という質問には、亡くなった方を思っただけ涙する場面も…。人の支援をするには、自分の人生を豊かに暮らすことも大切なのだろうな、と感じました。定山溪研修、今年も実り豊かでした！(mis)

こんご わん おーるぶれす 今後のワン・オールブレス

今回は、通常のワン・オールブレスの特別版を発行しました。今後も、ピアサポーターの活動を報告、発信していきます。また、その他の動きについても、発信していく予定です。今後とも、よろしく願います。(nis)

病棟転換型居住施設とは、病棟の一部をグループホーム等にして、病院の中に「退院」させる、というものです。「それは本当に退院と言えるのか？」「病院側の経営のためだけの策では？」と疑問の声が上がっています。

厚生労働省で検討した時に出席した25人のうち、当事者は2人、家族は1人のみ。当事者・家族の言葉は無視され、多数決で賛成派に押し切られた。これでは「当事者を参加させた」と言いたいだけにすぎない…と、当事者として参加した澤田さんは言います。

当事者が声を上げて行かなければ、このような事が繰り返されてしまうのでしょうか…？



ぶんかかい 分科会

22個の分科会のうち、私が出席した『ピアスタッフの今とこれから』についての報告をします。

精神障害を持つピアスタッフとして働く3名の発表では、服薬管理のようにピア性を活かさない仕事の仕方になってしまうこと、コミュニケーションに障害があるのに健常者スタッフと話すことの難しさ、「ピアにはこの仕事は任せられない」という雇う側の気遣い(?)等、様々な矛盾や疑問が出ました。

一方で、支援する人であり支援される人でもあるピアスタッフは、世の中がリカバリー中心の考え方に変わっていく上での重要人物である、とか、「支援する＝支援される」の固定された人間関係ではなくお互いに多面性を活かすべき、等、「これから」の希望の見える話も聞くことができました。また、まだ正式な資格ではなく予算がついていないものの、「ピアサポート専門員」にも期待が寄せられていました。(一方で、ピアが資格化すると利用者との距離ができてしまう、という意見も出ていました。)

それにしても、長年ピアスタッフを勤めている人からも「ピアスタッフとは何ぞや？」という疑問が出るところを見ると、「ピアとは何ぞや？」は永遠の課題なのでしょうね…。